

吉谷木工所

〈事業計画名〉全自動NC加工機の導入による伝統的「三宝技術」継承及び新たな市場への参入



生産プロセスの自動・効率化による 伝統的技術の継承と進化

事業の背景▶▶▶

需要低迷に対する生存戦略

伝統工芸品である「三宝」は古来より神様への供物・献上品をのせたり、一般的には鏡餅や月見団子等をのせたりする神具として日本人の生活に深く浸透しているが、近年のライフスタイルの変化により、その需要は減少を続けている。

年々業界が縮小していく中で、事業継続の為にも生産プロセスの精度・品質向上と効率化は必須であり、新たな主力製品の開発が急務となっていた。

また、伝統的「三宝制作技術」における要となる「挽曲げ工程」は熟練職人の手作業による技が必要だが、職人の高齢化が進み、若手への技術継承も解決すべき課題だった。

そこで生産プロセス刷新を計画。熟練職人の技を数値化・自動化し、工程の短縮・精度・品質・生産効率の向上を狙うと共に、古い加工機では対応が難しかった既存寸法以外のオーダーメイド対応や、新たな製品開発が可能な環境の構築を目指し、本事業を実施した。



事業の成果▶▶▶

多種オーダーメイドが対応可能に

本事業においては全自動NC加工機を導入し、挽曲げ専用のチップソーをメーカーと共同開発した。これにより、加工時のロス率を10分の1まで下げる事ができ、全体の加工時間も約20%短縮。加えて、制御性が配慮された近年の機械に更新した事で、刃物を扱う作業員の安全性が大幅に向上した。

また、従来の機械では4〜9寸の6サイズのみしか対応出来なかったが、その制限が無くなり、ミリ単位・多品種小ロット等の試作・オーダーメイド対応・四角形以外の多角形への対応が可能となり、非常に大きな成果を得る事ができた。

生産効率の向上により、まずは三宝の笠(盆)部分を活用し、和食文化と融合した新たな「器」として、市場参入を狙う。



吉谷木工所の概要・技術▶▶▶

伝統工芸品「三宝」と伝統的技術「挽曲げ」

当社は明治43年の創業以来110年以上、良質な吉野檜を原料に、伝統工芸品の神具「三宝」を主軸とした、各種木工製品の製造販売を手掛けている。

「三宝」は吉野郡下市町が発祥の地と言われ、国内シェアの8〜9割を占める一大産地であり、この地において当社は宮内庁や神宮御用達品として国内製造数の約3割を担っている。

原料である吉野檜は、木目が端正で色艶が良く光沢があり、吉野檜を用いた「三宝」は他の地域の檜と比べても色合いの美しさが際立ち、神饌を供える器にふさわしい品格があるとされている。



日本遺産

曲げの技術は
日本遺産にも登録されています



三宝の製造過程において「挽曲げ」と呼ばれる技術がある。檜の一枚板に溝を挽いて折り目とし、木のしなりを活かして角を作る技術であるが、天候・気温・湿度・木の水分量などに影響され、溝の深さや幅の微細な調整が必要となる。0.5 mmの違いで曲がらなかったり割れたりする為、15年以上経験がある熟練職人の勘と技が光る、最も重要かつ高難度の工程である。

「挽曲げ」は「下市の三宝制作技術」として日本遺産に認定されており、今後も継承すべき伝統的技術である。

吉谷木工所の製品開発と今後の展望▶▶▶

「神具」から「新具」へ

新加工機により多角形の挽曲げが可能となった事で、新製品のトング「TONGI」や、マルチボックス「八宝」など、伝統の三宝制作技術を雑貨に転用した製品が完成。

「八宝」はデザイン性の高さと利便性が評価され、地域の原石を発掘するプロジェクト「につぼんの宝物2020-21」の奈良県大会で審査員特別賞、全国大会の工芸・雑貨部門においてグランプリを受賞し、2023年夏予定の世界大会への参加権を獲得する事が出来た。また、「八宝」にインスピレーションを得た企業の声掛けで、職人合作のコラボ商品企画が立案され、茶道具一式8点を納める茶箱「八宝茶箱」に八宝箱担当として参加するなど、「八宝」を軸とした活動が活発化している。

近年では展示会やイベント、SNSなどメディア活動にも積極的に参加し、三宝を用いたライティングオブジェへの協力など、「神具」「伝統工芸品」という枠にとらわれず、伝統的技術の継承を命題としながら、新たなスタイルを提案する「新具」として技術を進化させた製品の展開を目指す。



吉谷木工所

業 種 分 類 木材・木製品製造業

事 業 内 容 三宝・寝具・木工品各種製造販売

代 表 者 名 代表 吉谷 良浩

所 在 地 奈良県吉野郡下市町新住41-10

連 絡 先 TEL:0747-52-2447 / FAX:0747-52-1478

ホームページ <https://yoshitani-sanbou.com/>

E-MAIL info@yoshitani-sanbou.com